

## 国際耕種と私・湖東朗<その2>

### 私的・国際耕種論

振り返ってみると、国際耕種というのはユニークな組織だったと思う。もともと「乾燥地で何かおもしろいことをやりたい」という人たちが集まって会社になったという背景があり、その過程で JICA 的 (ODA 的) でない、もっとおもしろいこと、意義のあることをやろう、ということで『マスカット基金』を作ったり、情報の共有や発信のために『AAINews』を発行してきた。

AAINews の創刊は 1995 年である。その時々話題や考えたこと、感じたことを書き留めてきた。2014 年の会社創立 30 周年記念として 1 冊の書籍にまとめたが、国際耕種の思いや理念に裏打ちされた、国際耕種らしい記事がちりばめられている。AAINews の意義は、情報を発信するだけでなく、ニュースの記事をとりまとめる段階で、そうした思いや理念を議論したり、共有するためにも有効だった。

「マスカット基金」の始まりは 1997 年のことである。草の根レベルの協力で小規模ながらも地域住民のニーズに沿った持続的な活動を実施しようとするもので、その一つのメモリアルな活動として、ジンバブエにおける現地 NGO/ZWP との協働があった。ZWP についてはこれまでも紹介しているので、ここではどう始まったか? という裏話を一つ。アフリカ日本協議会 (当時) の尾関さんから、さまざまな NGO をとりまとめるアンブレラ NGO の "PELUM" を紹介していただき、そこからやっとたどり着いたのが ZWP だった。しかし、そのプロジェクト・サイトは首都ハラレから遠く離れており、連絡手段もまだ電子メールはなくて、最初は手紙を送り、その返信が来て付き合いが始まった。その後、最初の顔合わせの打ち合わせのために、乗り合いバスを乗り継いで初めて彼らの事務所を訪問した時のことは鮮烈に記憶している。こうしてめぐり逢いと旅から始まった ZWP との連携は、何か運命的な縁の不思議さを感じる。そして、こうした「縁」を大切にすることも、国際協力では大切なことだと思う。

思うに、国際耕種は時代のちょっと先を行く、ありそうでない、そんな組織 (グループ) だったような気がする。そして、そのためにはミッションや意識を共有するための努力や工夫があった。

「組織」としては、ヒエラルキーのない、フラットなネットワーク的なものをめざしていたと思う。ネットワーク重視ということでは、社内だけではなく社外の人たちも重要で、同業他社を始め大学や NPO 関係者等さまざまな人たちや、準社員のような「社友」も何人かいた。1995 年に事務所を横浜から移転した時も、郊外ではあるがなるべく社外の人々が来やすいような場所を選んで町田とした。また忘年会もユニークで、毎年テーマを決めて社外から招待して、社員より社外の方が多い忘年会としていた時期もあった。

また社員間での情報共有の必要性も重視していて、帰国報告会や勉強会を随時行ったり、花見や花火大会等の季節の行事も大切にしていた。夕方の事務所での「飲みニケーション」もまた必要不可欠なものだった。こうした経験や場を通じて、ミッションや意識を共有してきた。

国際耕種で学んだことはたくさんあるが、あえて 3 つ程あげるとすれば、以下の通りである。

- 1) 決定事項をなるべくペンディングにしない。
- 2) 締切厳守。締切約 1 週間前までに仕上げる。
- 3) より良い準備が成功につながる。



大学の研究室? のような国際耕種の事務所